

社会に開かれた教育課程の実現を目指した教育の在り方について ～家庭・地域と連携した米づくりを中心とした食育の実践から～

女子栄養大学非常勤講師 太田 正久

1 はじめに

現在の子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあって、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。

このような時代の学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して、自ら考え、判断し、適切に対応し、課題を解決していくことが求められる。また、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。そのためには、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習改善が必要である。また、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、学校外の社会とも連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現が必要となる。特に、子供たちの学校生活の核となる教育課程について、その役割を捉え直していくことが必要である。

本稿では、家庭・地域と連携した米づくりを中心とした食育の実践から、他の教育活動における「社会に開かれた教育課程」の可能性について報告する。

2 学校における食育の重要性

1) 食育基本法

本法律の前文では、「子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくためには、何よりも「食」が重要である」、「食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている」、「子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるものである」と規定し、特に子供に対する食育を重視している。

2) 第3次食育推進基本計画

我が国の未来を担う子供たちへの食育推進は、健全な心身と豊かな人間性を育んでいく基礎をなすものであり、子供の成長、発達に合わせた切れ目のない推進が重要である。子供の食育における保護者、教育関係者の役割は、父母その他の保護者や教育、保育に携わる関係者等の意識の向上を図るとともに、相互の密接な連携の下、家庭、学

校、地域社会等の場で子供が楽しく食について学ぶことができるようにすることである。そして、食育推進の中で、食に関する感謝の念や理解を深めることが重要であり、食料の生産から消費に至るまでの循環を理解する機会や、食に関する体験活動に参加する機会を提供するなどの施策を講じることの重要性が述べられている。

3) 新学習指導要領

①学習指導要領における食育の位置付け・食に関する指導の目標

「学校における食育の推進」がこれまで以上に明確に位置付けられた。具体的には、小学校及び中学校では、各教科、道徳科及び総合的な学習の時間などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めること、食に関する指導の目標として、学校教育活動全体を通して、食に関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指すことが明示された。

(知識・技能) 食事の重要性や栄養バランス、食文化等についての理解を図り、健康で健全な食生活に関する知識や技能を身に付けるようにする。

(思考力・判断力・表現力等) 食生活や食の選択について、正しい知識・情報に基づき、自ら管理したり判断したりできる能力を養う。

(学びに向かう力・人間性等) 主体的に、自他の健康な食生活を実現しようとし、食や食文化、食料の生産等に関わる人々に対して感謝する心を育み、食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を養う。

②社会に開かれた教育課程

これからの学校には、各校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていく「社会に開かれた教育課程」の実現が求められている。学校が社会や地域とのつながりを意識する中で、社会の中の学校であるためには、教育課程もまた社会とのつながりを大切にする必要がある。そして、学校がその教育基盤を整えるにあたり、教育課程を介して社会や世界との接点を持つことが、これからの時代においてより一層重要となる。

社会に開かれた教育課程のポイント

1 教育課程を介して目標を社会と共有

社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

2 育成すべき資質・能力の明確化

これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。

3 カリキュラム・マネジメント

教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

③カリキュラム・マネジメント

「カリキュラム・マネジメント」とは教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことである。学習指導要領に基づき、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する学校教育目標を実現するために、教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくことが求められる。

育成を目指す資質・能力を育んでいくためには、学習指導要領に基づき、各学校が教育課程を組み立て、家庭・地域と連携・協働しながら実施し、目の前の子供たちの姿を踏まえながら改善を図ることが求められる。

「カリキュラム・マネジメントの3つの側面」

- 1 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。
- 2 子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。
- 3 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせる。

文部科学省：「学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策」から

3 具体的な実践

1) 学校・地域の概要

実践校は、埼玉県内の郊外にある小学校である。15年ほど前までは1学年2クラス程度の小さな学校だったが、今まで田であった場所が住宅開発され、近年は児童数1000人、学級数30を越える県内でも有数の大規模校となっている。

家庭は、多くが新興住宅地への転入者であり、若い両親と子供という核家族が多い。また、一部ではあるが3世代同居で稲作を行っている農家もあるが、地域の生活が稲作中心であったことや日本の主食の米を作る稲作についてかわりのある大人も子供も少ない。

そして、新興住宅地であるため、学校での子供間、学校・保護者・地域間の人間関係のトラブルもあり、よりよい人間関係づくり、新たなコミュニティづくりが学校課題の一つとなっている。

2) 今までの米づくりへの取組

今までは、1年生から6年生までの全校児童が少しずつ米作りを体験する方法で長い間実施されてきた。具体的には「職員や保護者・地域の方が準備し、全校児童が田植えと稲刈りを少しずつ行い、高学年が収穫した米で餅つきをし、全校児童で食す。」といった取組であった。子供たちにとっては野外での活動や餅つき等ができる楽しい活動であった。しかし、子供たちの学び、職員・保護者・地域の方の負担等から見直しの必要性も生じていた。

そこで、学習指導要領の改訂を視野に入れ、「カリキュラム・マネジメント」の考え方をもとに見直した。特に、「社会に開かれ教育課程」の視点を中心にし、よりよい学校

教育（食育）を通してよりよい社会を創るという目標を共有し、学校外の社会とも連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むことを目指した。

3) 目的

○よりよい食育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、学校外の社会とも連携・協働し、子供たちが未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む。

○主体的・対話的で深い学びとなる学習を追究し、子供、保護者、地域の方がお互いに学び合い、それぞれの成長につなげる。

4) 取組

社会に開かれた教育課程の3つのポイントの視点をもとに計画・実践した。

①教育課程を介して目標を社会と共有

社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

②育成すべき資質・能力の明確化

これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。

- ・様々な人とのかかわり学び、学びを通じて自分の存在が認められることや、自分の活動によって何かを変えたり、社会をよりよくしたりできる実感を持つことができる資質・能力

- ・人間一人一人の活動が身近な地域や社会生活に影響を与えるという認識につながりこのようなことを積み重ねることにより、地球規模の問題にも関わり、持続可能な社会づくりを担っていこうとする意欲。

【具体的な取組】

4年生の総合的な学習の時間でのお米作り（食に関する探求的な学習）を中核にし、他教科領域において、教科横断的に取り組むようにした。

それぞれの教科・領域の特質に応じてどんな力がつけられるか、また学習指導要領にある食にかかわる資質・能力も再確認した。

■総合的な学習の時間

- ・米作りを食料の生産から消費に至るまでの循環を理解する機会、食に関する体験活動に参加する機会とし、1年間継続的に取り組む。特に、様々な体験に取り組む中で、これからの変化が激しい社会を生き抜く力を育成する。

■各教科領域等

- ・国語－新聞作りを通じた情報収集・整理・発信等（思考力・判断力・表現力等）

- ・社会・理科

社会－食料生産に従事している人々の工夫や努力についての考察（知識・技能、思考力・判断力・表現力等）

理科－イネや生き物等の観察（知識・理解、思考力・判断力・表現力等）

- ・ 道徳－体験活動（食べ物を大切にし、食べ物を作った人への感謝の心など人間性）
- ・ 図工・体育－学んだことの表現、図工は絵画表現、体育は運動会での表現運動（思考力・判断力・表現力等）

参考：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（食に関する指導の手引き）



③カリキュラム・マネジメント

教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

○地域の人材・物的資源

- ・ 人的資源－指導者として米づくり経験者（地域の老人会）、協力者として保護者
- ・ 物的資源－加工方法（特に環境への配慮）学区内にある無洗米工場

○活用する上での留意点

特に、目標を共有するために、目的や取組について事前の打ち合わせを密に行った。

施設については、事前見学を行い見学の価値や方法をよく確認した。

④学び合い

教育活動を通して、子供、保護者、地域の方がお互いに学び合い、それぞれが成長することを目指すこと。

4 具体的な活動と子供たちの様子・学び

【4月】

○田起こし見学等・・・田周辺地域の昔の様子や田起こし等について地域の方から話を聞いた。田起こし後の田に入り、土の感触や臭い嗅ぐなど体験し、様々なことを感じていた。

○苗作り見学・・・苗作り等の話を聞いたり、苗を撫でたりした。

○代掻き見学・・・ハイテクを搭載したトラクターによる代掻きを見学した。代掻き後の田に裸足になって入り土の感触を味わったり、虫を発見したりし大喜びだった。

【5月】

○田植え・・・地域の方から方法を教えてもらい、丁寧に苗を植えていた。保護者もお手伝いをしながら共に体験した。地域の方は、現在は行わない手植えをすることで昔のことを思い出しながら、とても嬉しそうだった。

○育苗・・・学校でも苗を育てた。成長の様子をよく観察し、小さな変化に気付くようになった。また、田の見学に行き、学校の苗と比較したり、水生昆虫などを見つけて喜んだりしていた。

○イネの観察・・・休みの日には、親子で観察に行く家庭も出てきた。その際、地域の方と話をすることもあり、家庭・地域の交流が生まれてきた。

○カブトエビの発見・・・田にいたカブトエビにとっても興味を持ち、学校でも飼育・観察した。研究している大学の方からも話を聞き、カブトエビが生きた化石である、田の雑草を食べてくれる、きれいな水のところにしか生息しない等を知り、イネを育てている田の安全性がわかるなど、様々なことを学んだ。



【7月】

○未来の地域づくりの表現・・・今まで取り組んできた米作りと地域に新しく建設されている流通基地等から、未来の地域を考え、図工の絵画で表現した。

【8月】

○イネの観察（各家庭）・・・なかなか観ることができないイネの花が開花し、保護者にメール発信したところ、親子で観察する家庭が多数あった。ここでも、地域の方が説明してくださり、家庭・地域の交流が深まった。

【9月】

○米作りからの学びの表現・・・今まで取り組んできたことや今後の収穫等について、お世話になった方々や地域の方に伝えたいことを運動会で表現した。

【10月】

○稲刈り・・・地域の方から教えてもらい、真剣に取り組んでいた。保護者の方も手伝いだけでなく、稲刈りを楽しんだ。子供・地域の方・保護者の交流がどんどん深まってきた。



【11月】

○無洗米加工工場の見学・・・収穫後のお米について、地域・保護者の方とともに学んだ。（無洗米が水質汚染を防ぎなど環境にやさしい、他の米と比べて高価ではない、工場は機械化が進み従業員が少ないこと等）

【12月】

○収穫したお米を食す・・・4年生が給食で、その後全校で白米を食した。全校の子供たちは美味しく感謝しながら食べていた。特に、4年生は「お米が光っている、甘くておいしい「社会に開かれた教育課程」の実現を目指した食育の実践は大きな成果をあげることができた。」等細かな感想を述べ、全員完食だった。

○感謝の会・・・お世話になった地域の方を招いて、感謝の会を行った。子供たちが主体となって地域の方々への感謝の気持ちを伝える会を行った。4月からの取組を画像で振り返りながら、手紙や歌などで感謝の気持ちを伝えた。地域の方も子供も嬉しそうな表情で、涙を浮かべていた人もいた。その後、お世話になった方々と給食会食でお米を食べ交流し、人間関係が深まった。

5 評価

1) 成果

「社会に開かれた教育課程」の実現を目指した食育の実践は、教育活動の質の向上、教員の資質向上等大きな成果をあげることができた。具体的には以下のとおりである。

①教育課程を介して目標を社会と共有

社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

○社会や世界の状況

持続的可能な社会づくりが必要な時代にあって、食育の一環として、米作りを中心に食料の生産から消費に至るまでの循環を理解する機会や食に関する体験活動を1年間継続的に取り組み、様々な深い学びがあった。

- ・安全な食料生産（肥料・消毒、水を汚さない加工、資源を有効利用する循環型）
- ・食料の生産等に関わる人々に対して感謝する心、食べ物を大切にする心の育成（食品

ロスの減少へ)

○よりよい学校教育

- ・教科横断的に学習を関連づけたことで、教員側は準備・指導しやすくなり、子供達は学びやすくなった。
- ・教員の教材研究が重要となり、学年を中心に教材開発・指導法についての情報を共有化でき、質の高い教育の実践につながった。

○教育課程を介して目標を社会と共有

- ・総合的な学習の時間を核とし、教科横断的な学習としたことで、子供や地域の実態に即した教育課程を編成することができた。

②育成すべき資質・能力の明確化

これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。

○これからの人生を切り拓き、社会を創り出していく子供たちに求められる資質・能力

- ・体験活動を中心に年間を通して、地域の方や保護者とのかかわることで、多様な他者とよりよく協働する力が育めた。
- ・米作りの大変さや苦労、喜びを経験することで、人や物への感謝の心や粘り強く取り組むこと等人間性を高めることができた。
- ・各教科・領域等で身に付ける資質・能力を明確にすることで、指導方法等も具体的になり、学習の充実が図れた。
- ・学習において達成感を味わったり、食材を全校の子供たちに提供したりしたことで、これからの生きる基となる「自己肯定感・自己有用感」を高めることができた。

③カリキュラム・マネジメント

教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

○地域の人的・物的資源

- ・外部人材を活用したことで、事前打ち合わせを通し、教員間及び学校と社会の目標の共有化が図れた。
- ・子供を介した地域・保護者の連携した教育活動を通し、新たなコミュニティーづくりにつながられた。

④学び合い

子供、保護者、地域の方がお互いに学び合い、それぞれが成長することができた。

【地域の方】

- ・子供・保護者との新たな人間関係づくり、生きがいくりにつながった。(自己肯定感・自己有用感)

【保護者】

- ・新旧住民双方が地域への愛着を深めることができた。
お米作りや地域の歴史を学ぶ中で、地域の方のすばらしさ等を感じた。
- ・子供のすばらしさや可能性を感じ、地域で子供を育てるという雰囲気が高まった。

- ・これからの教育の在り方、教職員の情熱・教育愛等を知り、学校への協力する気持ちが高まった。

【教職員】

- ・魅力的な教育活動を実践する中での教員としてのやりがいが高まった。
- ・資質・能力が向上した。(これからの教育の在り方「社会に開かれた教育課程」「主体的・対話的で深い学び」等)

【子供、地域・保護者の方、教職員】

- ・新たな人間関係づくりができた。
- ・地域の未来、自分の生き方を考える機会となった。
- ・日本の食について考える機会となった。

2) 課題

更なる教育の質の向上を目指し、「カリキュラム・マネジメントの3つの側面」を視点に、目の前の子供たちの姿を踏まえながら改善を図ることが今後の課題である。

- 1 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。
- 2 子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。
- 3 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせる。

6 他の教育活動における「社会に開かれた教育課程」実現の重要性・可能性

今回の実践から、「社会に開かれた教育課程」の実現が学校教育の充実、人づくり・社会づくり等にかかわる極めて重要なことであると強く感じた。また、様々な教育活動への汎用の可能性も感じた。

そこで、所属校での実践を踏まえ、現在育成にかかわっている養護教諭の職務にかかわる汎用例を示す。

1) 各教科・領域等

○「命の大切さ」を学ぶ保健教育（教科横断的な学習）

・いじめ・不登校等絶えない現状を踏まえ、命を大切にできる子の育成という目標を学校と社会が共有する。具体的には、関連する授業を保護者参観や保護者参加型を取り入れるなどして保護者との目標の共有を図る。

- ・教科横断的な学習として、保健、総合的な学習、道徳等で関連付けながら取り組む。
- ・外部人材として助産師等を招き、命の誕生・大切さ等について話を聞く。

2) 他の教育活動

○学校と地域が連携した学校保健委員会（「社会に開かれた教育課程」の視点で）

学校保健委員会の取組は、教育課程ではないが、子供たちの健康づくりを学校・家庭・地域が連携した推進する重要な活動であり、「社会に開かれた教育課程」と考え方が汎用できる。

- ・子供たちの健康づくりを目指し、学校・保護者・地域で連携して取り組む。
- ・子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、健康課題の解決に取り組む、課題解決を図る。
- ・地域人材（学校医等の専門家）を活用し講演を聞くなどする。また、参加者による主体的・対話的で深い学びを目指した意見交換等により、課題解決策を考える。このことをもとに、それぞれの立場においてPDCAサイクルで実践を重ね、課題解決を図る。

7 おわりに

子供一人一人に今後の変化の激しい社会を生き抜く力を育成することは極めて重要である。このことは学校だけで実現できることではなく、「社会に開かれた教育課程」の考え方に基づき、よりよい学校教育を実践し、よりよい社会を創るという目標を共有し、学校外の社会とも連携・協働しながら、子供たちが未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むことが重要である。

現在、学校現場は負担軽減・働き方改革が求められている。そんな時だからこそ、子供たちにとって何が重要かを再確認し、授業改善・よりよい学校教育の実践が必要である。このことは、教職員のやりがいの創出や信頼される学校づくりにもつながる重要なことである。このことを踏まえ、学校の努力に期待するとともに、私自身も尽力していきたい。

<引用・参考文献>

農林水産省：「第3次食育推進基本計画」2016.3

文部科学省：「栄養教諭による食に関する実践事例集」2009.3

文部科学省：「小学校学習指導要領解説・総則編」2018.7

文部科学省：「食に関する指導の手引き(第二次改訂版)」2019.3

☆ ★ ★
★種刈りをした感想を書こう